

埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

樋の上遺跡

2012

埼玉県熊谷市遺跡調査会

埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

ひ の うえ い せき
樋 の 上 遺 跡

2012

埼玉県熊谷市遺跡調査会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、このような文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、今回報告いたします樋の上遺跡は、熊谷市西部の拾六間及び三ヶ尻地区に広がる遺跡であります。遺跡では過去、学校建設やほ場整備に先立ち、発掘調査が行われており、縄文時代から江戸時代まで長期間にわたって人々が生活の場として利用してきたことが確認されております。そして、遺跡の主体となる古墳時代から平安時代にかけては、これまでの百軒以上の住居跡の発見から、大規模な集落が営まれていたことが明らかになってきております。

このたび、遺跡の範囲内において幼稚園園舎建設の計画がもちあがりました。熊谷市教育委員会では、事業者と遺跡の保存策について協議を重ねましたが、施設の性格上、破壊を受ける部分に関しては記録保存の処置もやむを得ないとの結論に達し、急遽、遺跡調査会を設立し、発掘調査を実施いたしましたところであります。

本書はその発掘調査成果をまとめたものであり、今後、埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました学校法人浅見学園、並びに地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成24年 3月

熊谷市遺跡調査会
会長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市拾六間字芝付419番地他に所在する樋の上遺跡（埼玉県遺跡番号59-018）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、幼稚園園舎建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、事業者学校法人浅見学園からの委託費をもって熊谷市遺跡調査会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第I章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成23年8月25日から平成23年9月7日までである。
整理・報告書作成期間は、平成23年9月8日から平成24年3月23日までである。
- 5 発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会森田安彦、松田 哲が、本書の執筆・編集は、松田が行った。
- 6 発掘調査及び遺物の写真撮影は、松田が行った。
- 7 発掘調査に係る基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託して行った。
- 8 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 9 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

青木克尚 新井 端 出縄康行 金子正之 小林 高 菅谷浩之 知久裕昭 鳥羽政之
宮本直樹 村松 篤 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

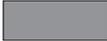
凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

調査区全測図… 1 / 100 住居跡・土坑… 1 / 40 溝跡… 1 / 60

- 2 遺構挿図中のスクリーントーンは、次のとおりである。

 = 地 山  = 被熱箇所

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。

土師器… 1 / 4 縄文土器… 1 / 3

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

縄文土器・土師器断面：白抜き

- 6 遺物拓影図は向かって左に外面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcmである。() が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子

F…白色針状物質 G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石

L…片岩 M…砂粒 N…礫 O…繊維

- 8 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の立地と環境	3
III 遺跡の概要	9
1 樋の上遺跡について	9
2 調査の方法	12
3 検出された遺構と遺物	12
IV 遺構と遺物	15
1 住居跡	15
2 溝 跡	17
3 土 坑	19
4 ピット	20
V 調査のまとめ	21

挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	3	第6図	第1号住居跡	16
第2図	周辺遺跡分布図	5	第7図	第1号住居跡出土遺物	17
第3図	調査地点位置図	11	第8図	第1号溝跡・出土遺物	18
第4図	調査区全測図	13	第9図	第1・2号土坑	19
第5図	基本土層図	14			

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	6	第4表	第1号溝跡出土遺物観察表	19
第2表	周辺古墳群一覧表	7	第5表	ピット計測表	20
第3表	第1号住居跡出土遺物観察表	17			

図版目次

図版1	調査区西側全景 調査区東側全景	図版5	第1号溝跡
遺構		図版6	第1号土坑 第2号土坑
図版2	第1号住居跡	遺物	
図版3	第1号住居跡カマド 第1号住居跡カマド煙道部遺物出土状況	図版7	第1号住居跡 第7図1・2・3 第1号溝跡 第8図1～9・10
図版4	第1号住居跡覆土堆積状況(1) 第1号住居跡覆土堆積状況(2)		

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成23年7月13日、事業者である学校法人浅見学園理事長野中仁一氏より、熊谷市拾六間字芝付419番地他地内における幼稚園園舎建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会では事業地内が樋の上遺跡に該当し、縄文時代から中世までの遺跡が所在する地域である旨を伝えたと、事前に地耐力検査を実施するとの連絡を受けたことから、その掘削工事に立会った結果、開発予定箇所には遺構・遺物が所在することが確認された。この結果を受け、熊谷市教育委員会は、計画内容では遺跡が破壊されてしまうことから発掘調査を実施する必要がある旨を伝え、保存策等について事業者と協議を行ったが、工事計画の変更は不可能であるとの結論に達したことから、さらに詳細な情報を得るため、8月8・9日に遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、開発予定箇所ほぼ全面に遺構が分布することが確認されたため、工事により破壊される箇所のみ記録保存の措置を講ずることとなった。これにより埼玉県教育委員会教育長から事業者あてに平成23年8月24日付け教生文第4—559号で発掘調査実施の指示通知がなされた。

発掘調査を実施するにあたっては、迅速に対応するため、まず埋蔵文化財の取扱いの措置及び発掘調査の実施方法等に関する協定書を熊谷市と事業者間で締結し、これに基づき平成23年8月22日に熊谷市遺跡調査会を設立し、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査に先立ち、熊谷市遺跡調査会会長からは文化財保護法第92条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が平成23年8月25日付けで提出され、同日より発掘調査を開始した。

発掘調査に関わる届出及び届出に対する埼玉県教育委員会からの指示通知は、以下のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査の届出 平成23年8月25日付け熊遺発第2号

埋蔵文化財の発掘調査についての通知 平成23年8月31日付け教生文第2—33号

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成23年8月25日から9月7日まで行われた。調査面積は100㎡である。

調査は、まず重機による表土除去を行った。そして、作業員を導入して遺構確認作業を行い、遺構掘削に伴う排出土の置き場を確保するため、調査区を東西半分に分けて発掘作業を行うこととした。遺構の発掘作業はまず西側から開始し、土層断面図の作成、遺物の取り上げ、遺構平面図の作成、写真撮影等の作業を順次行った。そして、西側が終了した後、続けて東側で同様の作業を順次行い、9月初旬に現場におけるすべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後から平成24年3月まで実施した。作業は、まず遺物の洗浄・注記・復元作業、遺構の図面整理を行い、続けて遺物の実測・トレース、遺構のトレースを実施し、遺構・遺物の版組を行った。そして、遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行った。作業が終了した1月には印刷業者選定の後、報告書の印刷に入

り、数回の校正を行い、3月下旬に報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市遺跡調査会

会 長	野原 晃 (熊谷市教育委員会教育長)
副 会 長	藤原 清 (熊谷市教育委員会教育次長)
理 事	菅谷 浩之 (熊谷市文化財保護審議会会長)
	小野美代子 (熊谷市文化財保護審議会委員)
監 事	正田 知久 (熊谷市教育委員会教育総務課長)
事務局 長	斉木 千春 (熊谷市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	根岸 敏彦 (熊谷市教育委員会社会教育課担当副参事)
統括調査員	森田 安彦 (熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長)
調 査 員	松田 哲 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査)

発掘調査作業員

岡部幸夫 笠原博明 神谷 榮 野呂正弦 長谷川進男 笛木弘一

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成17年に妻沼町及び大里町、平成19年に江南町との合併を経て、県北初の20万都市となり、平成21年4月からは「特例市」として発足したところである。

熊谷市は北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧熊谷市と旧大里町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に向って流れており、両河川が最も近接する地域である。地形的には、市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第1図）。

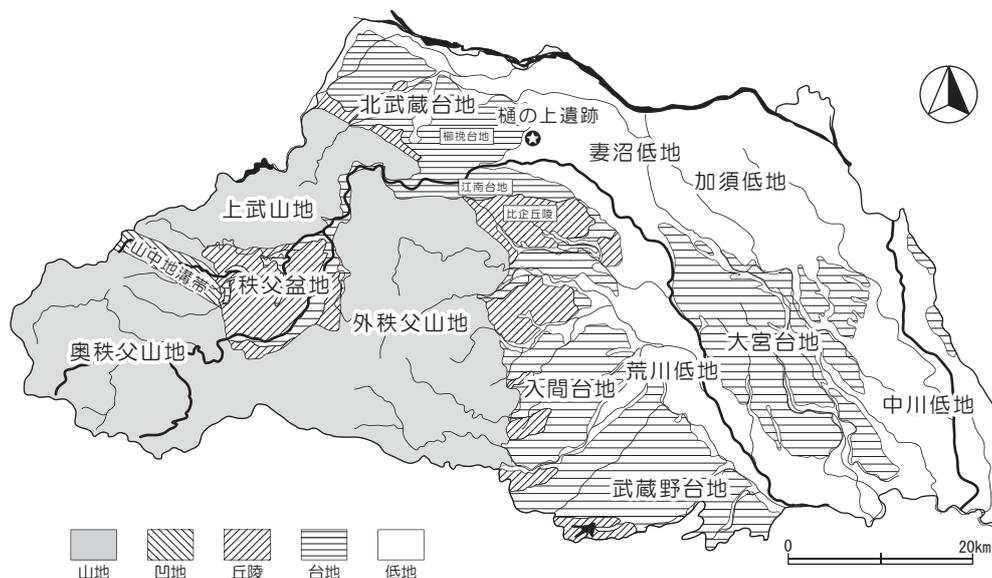
櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東は JR 高崎線籠原駅から北へ約2 kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mで、妻沼低地に向って緩やかに下る。櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がる。新荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛引台地南東端には、丘陵地である観音山（標高81m、第3紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mを測る。

今回報告する樋の上遺跡は、熊谷市西部の拾六間及び三ヶ尻地区に広がっているが、今回の調査地点は拾六間地区に所在し、JR 高崎線籠原駅南口からは約2 kmの距離にある。遺跡は櫛引台地東端縁辺部下の新荒川扇状地内の自然堤防上、標高約40～44mに立地している。この辺り一帯は関東造盆地運動による地盤の沈降及び河川の氾濫等の影響により厚い表土層に覆われている箇所が多いが、今回の調査地点では現地表面下約0.7m前後で遺構確認面であるローム層が検出された。

次に樋の上遺跡周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代は、本遺跡の北約2.5kmに所在する籠原裏遺跡（33）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。その他では荒川右岸の江南台地上に立地する西原遺跡（19）以外にみられない。

縄文時代は早期段階まで溯る。荒川右岸では多数遺跡がみられるが、本遺跡周辺では櫛引台地北端に



第1図 埼玉県の地形図

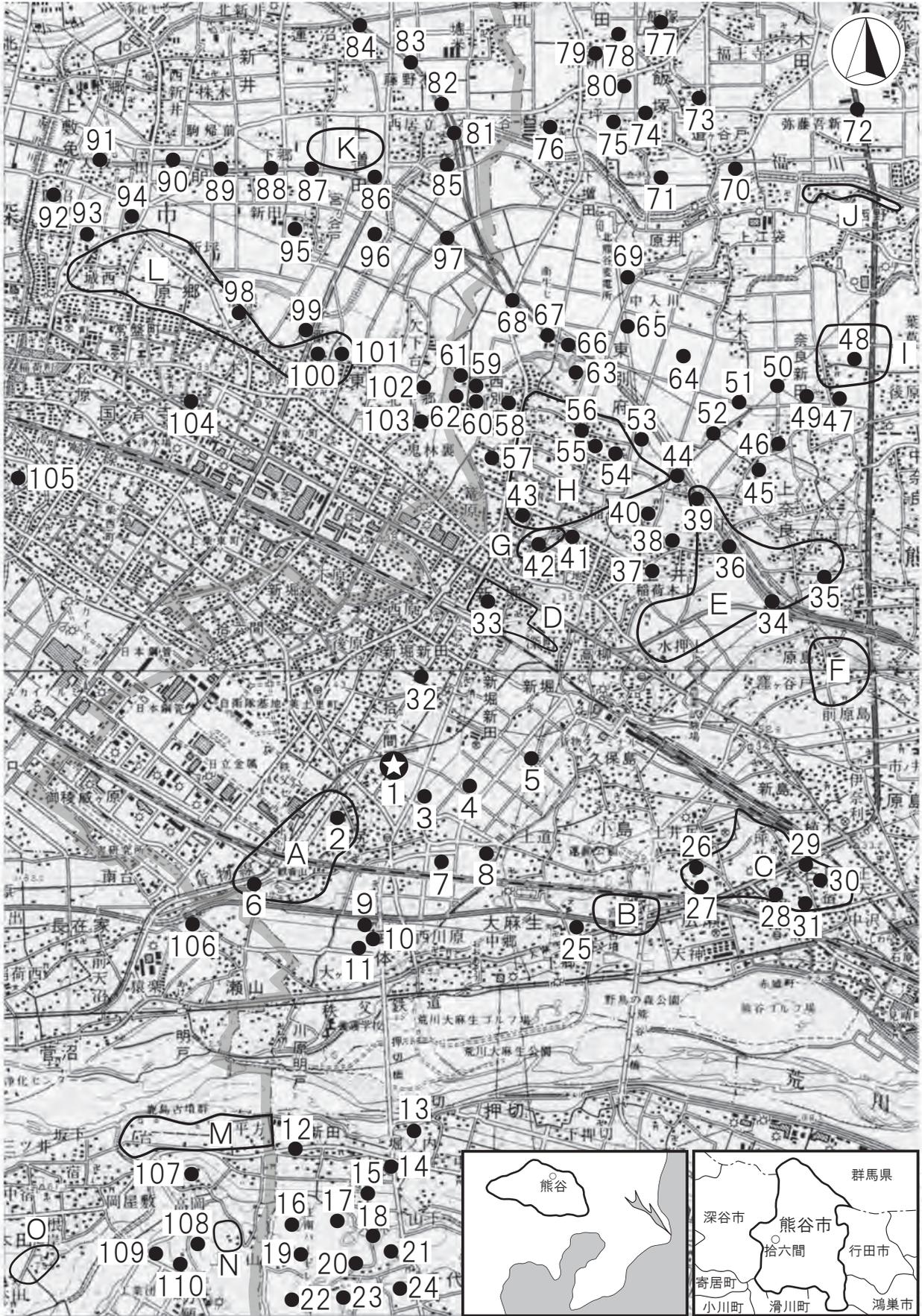
位置する深谷市東方城跡（101）において早期の尖頭器が検出されているのみである。前期になると遺跡数も次第に増えはじめる。台地上にある三ヶ尻遺跡（2）では集落跡が確認されており、本遺跡でも現時点では遺構が認められていないが、遺物が検出されている。中期は遺跡数が非常に多くなり、特に中期後半、加曽利E式期のものが多い。前期と異なり、台地の他に低地上からも集落跡が確認されているが、特に櫛引台地北東端及び台地下の自然堤防上に集中する。隣接する深谷市でも集落跡が多数確認されているが、自然堤防上にあるものが多い。後期になると遺跡数は減少するが、中期同様、櫛引台地北東端及び台地下の自然堤防上に立地する。深谷市内においても台地縁辺部及び台地下の自然堤防上から遺跡が確認されている。晩期はさらに遺跡数が減少する。地図中には示せなかったが、市東部では低地上に立地する諏訪木遺跡で集落跡が確認されたが、その他にはみられない。深谷市では低地上にいくつかの遺跡が認められる。上敷免遺跡（91）では、晩期でも終末の浮線土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみとれる資料である。

弥生時代については、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。遺跡は、縄文時代中期以降集落が営まれた櫛引台地北東端及び台地下の自然堤防上に集中している。

特筆すべき事項としては、自然堤防上に位置する横間栗遺跡（67）から前期末～中期前半の再葬墓が13基確認されたことが挙げられる。再葬墓一括資料は、1999年3月に埼玉県指定になっている。横間栗遺跡の南東に位置する関下遺跡（66）では、弥生時代中期中頃の竪穴住居跡が確認され、南側に隣接する石田遺跡（63）からも同時期の遺構と遺物が検出されており、同一集落の可能性がある。また地図中には示せなかったが、市東部では東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡やその墓域とされる行田市小敷田遺跡などがある。深谷市では自然堤防上にいくつかの遺跡がみられ、上敷免遺跡では横間栗遺跡と同時期の再葬墓が確認されている。また包含層からであるが、県内では初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期後半以降は、市東部では北島遺跡、前中西遺跡などがあるが、西部では確認例が少なく、深谷市では明戸東遺跡（87）など後期の遺跡が自然堤防上においていくつか点在するだけである。

古墳時代になると、自然堤防上への進出がより活発化する。前期は本遺跡周辺では確認例がやや少ないが、一本木前遺跡（51）では、90数軒という膨大な数の住居跡の他に、4基の方形周溝墓等も確認されている。特筆すべき事項としては、2号方形周溝墓の主体部からヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯等が検出されたことが挙げられる。なお、住居跡群と周溝墓群には若干の時期差が存在し、集落跡が古く、周溝墓群が新しいことが判明している。深谷市では、東川端遺跡（96）をはじめとして自然堤防上の集落跡、方形周溝墓等が確認されている。中期は本遺跡周辺では5世紀末の古墳として市指定史跡になっている横塚山古墳（I：奈良古墳群）があるのみである。B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。市東部では北島遺跡、中条遺跡、中条古墳群周辺などで確認例がみられる。後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は大規模になり、自然堤防上にも多数営まれるようになる。そして、これらの集落跡は奈良・平安時代へと継続して営まれるものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び自然堤防上に築造されている。荒川左岸の櫛引台地上には、三ヶ尻古墳群（A）、籠原裏古墳群（D）、在家古墳群（G）、別府古墳群（H）、自然堤防上には広瀬古墳群（B）、石原古墳群（C）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、上江袋古墳



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			56	埋鳥遺跡	縄文中、奈良・平安
1	樋の上遺跡	縄文前～後、古墳後、奈良・平安、中・近世	57	大竹遺跡	古墳後、奈良・平安
2	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	58	西別府館跡	平安末～中世
3	若松遺跡	中・近世	59	西方遺跡	奈良・平安、中・近世
4	黒沢館跡	中世	60	西別府廃寺	古墳後、奈良・平安、中・近世
5	東遺跡	平安、中世	61	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
6	森遺跡	古墳後	62	西別府遺跡	古墳後、奈良・平安
7	松原遺跡	中・近世	63	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前
8	庚申塚遺跡	近世	64	別府条里遺跡	奈良・平安
9	社裏北遺跡	中世	65	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安
10	社裏遺跡	中世	66	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後
11	社裏南遺跡	中世	67	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前・中、奈良・平安、近世
12	新田裏遺跡	古墳後、奈良・平安	68	根絡遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
13	堀ノ内遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	69	入川遺跡	縄文後、古墳前・後
14	新屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	70	道ヶ谷戸遺跡	弥生中、古墳後、平安
15	大林遺跡	古墳後、奈良・平安	71	道ヶ谷戸条里遺跡	縄文後、古墳後、平安
16	姥ヶ沢遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前・後	72	弥藤吾新田遺跡	古墳前・中
	姥ヶ沢埴輪窯跡	古墳後	73	羽黒遺跡	古墳後
17	富士山遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前、奈良	74	飯塚南遺跡	縄文後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世
18	権現坂埴輪窯跡	古墳後	75	八幡木遺跡	古墳後、奈良
19	西原遺跡	旧石器、縄文前～後、奈良・平安	76	踏切遺跡	平安
20	北方遺跡	縄文早	77	飯塚遺跡	弥生中、古墳後、奈良・平安
21	権現坂遺跡	縄文前・中、古墳中・後	78	藤屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安
22	山神遺跡	中世	79	前新田遺跡	古墳後、奈良・平安
23	天神谷遺跡	縄文中、奈良・平安	80	中西原遺跡	奈良・平安
24	南方遺跡	縄文中、中・近世	81	居立遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
25	下郷遺跡	奈良・平安	82	城北遺跡	古墳後、平安
26	高根遺跡	縄文前、古墳後、平安、中・近世	83	柳町遺跡	古墳中・後、奈良・平安、中世
27	不二ノ腰遺跡	奈良・平安	84	砂田遺跡	古墳中・後、平安、中世
28	田角遺跡	奈良	85	前遺跡	古墳前、奈良・平安、中・近世
29	天神前遺跡	古墳中、中世	86	原遺跡	縄文後、晩、古墳後
30	兵部裏屋敷跡	中世	87	明戸東遺跡	縄文中・後、弥生後、古墳後、奈良・平安
31	御蔵場跡	近世	88	新田裏遺跡	古墳中、弥生後、奈良・平安、中世
32	拾六間後遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	89	新屋敷東遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
33	籠原裏遺跡	旧石器、縄文前・中、古墳後、平安、中・近世	90	本郷前東遺跡	縄文後、古墳後、奈良・平安
34	下河原上遺跡	近世	91	上敷免遺跡	縄文中、弥生中・後、古墳後、奈良・平安
35	本代遺跡	古墳後、近世	92	皿沼城跡	中世
36	下河原中遺跡	奈良・平安	93	城西遺跡	奈良・平安
37	稲荷木上遺跡	古墳後	94	八日市遺跡	縄文晩、古墳後、奈良・平安、中・近世
38	水押下遺跡	古墳後	95	宮ヶ谷戸遺跡	縄文中・後、弥生中・後、古墳後、奈良・平安
39	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	96	東川端遺跡	古墳前・後、奈良・平安
40	玉井陣屋跡	平安末～中世	97	清水上遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前・後、奈良・平安
41	五反畑遺跡	中世	98	根岸遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世
42	在家遺跡	古墳後、奈良・平安	99	城下遺跡	縄文中・後、古墳後、平安、中・近世
43	別府三丁目遺跡	奈良・平安	100	杉町遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
44	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安	101	東方城跡	縄文早・後、中世
45	奈良氏館跡	平安末～中世	102	幡羅遺跡	古墳後、奈良・平安
46	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	103	下郷遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
47	東通遺跡	古墳後	104	疋鼻和城跡	中世
48	横塚遺跡	古墳前、平安	105	桜ヶ丘組石遺跡	縄文後
49	西通遺跡	古墳後	106	大門遺跡	奈良・平安
50	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	107	舟山遺跡	縄文早・中、中世
51	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世	108	荷鞍ヶ谷戸遺跡	縄文後、弥生後
52	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安	109	白草遺跡	旧石器、弥生後、平安
53	寺東遺跡	縄文中・後	110	諦光寺廃寺	中世
54	別府氏館跡	平安末～中世	111	円阿弥遺跡	縄文前、弥生後、古墳中
55	別府城跡	平安、中世			

群（J）、深谷市上増田古墳群（K）、木の本古墳群（L）などがあり、荒川右岸の台地上でも埼玉県指定史跡である深谷市鹿島古墳群（M）をはじめとして多数の古墳群が築造されている。また、古墳群の他にも姥ヶ沢埴輪窯跡（16）、権現坂埴輪窯跡（18）など埴輪の窯跡もみられるようになる。古墳群

第2表 周辺古墳群一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			I	奈良古墳群	古墳中期後～末
A	三ヶ尻古墳群	古墳後	J	上江袋古墳群	古墳後
B	広瀬古墳群	古墳末	深谷市		
C	石原古墳群	古墳後	K	上増田古墳群	古墳後
D	籠原裏古墳群	古墳末	L	木の本古墳群	古墳後
E	玉井古墳群	古墳後	M	鹿島古墳群	古墳後～末
F	原島古墳群	古墳後	N	清水山古墳群	古墳後
G	在家古墳群	古墳末	O	上大塚古墳群	古墳後
H	別府古墳群	古墳後			

は、概ね6世紀から7世紀ないし8世紀初頭にかけて築造されたが、埴輪をまったく持たない末期の古墳群としては籠原裏古墳群、在家古墳群、玉井古墳群、広瀬古墳群などがある。市内の古墳群で特筆すべきことは、籠原裏古墳群で墳形が八角形を呈する古墳時代末期の八角墳が検出されたこと、広瀬古墳群中の宮塚古墳は上円下方墳という特異な形態をしていること（昭和38年国指定史跡）などが挙げられる。特に籠原裏古墳群は、後述する深谷市幡羅遺跡（102）や熊谷市西別府廃寺（60）、西別府祭祀遺跡（61）などといった郡家や郡家に関連があると思われる遺跡と時期的・地理的に近い関係にあり、注目に値する古墳群と言える。

律令体制の始まる奈良・平安時代は、本遺跡周辺一帯は武蔵国幡羅郡に属する。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市北部から西部にかけてと深谷市東部を含む一帯が該当すると考えられている。深谷市幡羅遺跡では、平成13年に郡家の正倉と推定される大型建物群が確認されて以来、幡羅郡家推定地として確認調査が開始されており、これまでに多数の大型正倉建物群や区画大溝などが確認されている。郡庁は未確認であるが、熊谷市西別府廃寺や西別府祭祀遺跡も含めてこの地域一帯は、当時の中心地だったことが徐々に明らかになってきている。

集落跡は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。また本遺跡周辺の集落跡から出土する須恵器は、武蔵国四大窯跡の1つである寄居町末野窯跡産のものを多く含む傾向にある。集落跡以外で注目すべき遺跡としては、前述の西別府廃寺と西別府祭祀遺跡がある。両遺跡は、櫛引台地北東端の西別府に所在する。西別府廃寺は8世紀初頭に創建された県内でも古い寺院であり、平成2・4年に行われた発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、溝跡等が検出されている。出土した瓦には9世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、西別府廃寺北西部の台地縁辺部に位置し、湯殿神社裏の湧水堀にある。神社裏の湧水部分からは、土師器、須恵器の他に馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板等の滑石製模造品が多数検出され、これらの遺物は水辺での祭祀に用いられたと考えられている。平成4年度に行われた発掘調査では、古墳時代末から平安時代でも末期に位置づけられる土器群が多数検出されており、祭祀が平安時代の終わり頃まで存続していたことが確認されている。西別府廃寺及び西別府祭祀遺跡と深谷市幡羅遺跡は、時間的・空間的に密接な関係にあったことは明白であり、現在も継続して実施している確認調査によってさらに詳細が判明してくるものと思われる。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団の館跡がみられるようになるが、その実態は不明なものが多い。東別府地区にある別府城跡（55）は、別府氏の居館で現在も土塁と空堀が一部残っている。また、三ヶ尻地区では中世の遺跡や遺構が比較的多く確認されている。中でも黒沢館跡

(4) は、発掘調査の結果、出隅を持ち全周する堀と土塁、虎口跡等が検出され、渡辺崋山が記した文献『訪蹊録（ほうへいろく）』所収の「黒沢屋敷」と発掘調査成果が一致するという大変貴重な例である。また本遺跡を含め、周辺に位置する若松遺跡（3）、社裏北遺跡（9）、社裏遺跡（10）、社裏南遺跡（11）では、埋葬跡が多数検出されている。深谷市では皿沼城跡（92）、疋鼻和城跡（104）、東方城跡など城跡が多数確認されている。

近世については、櫛引台地北東端に立地する西方遺跡（59）において墓地群が確認されている他にいくつか例がみられるが、中世同様、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ 遺跡の概要

1 樋の上遺跡について

樋の上遺跡の所在する拾六間及び三ヶ尻地区では、過去数回にわたり、発掘調査及び報告が行われている。発掘調査及び報告が行われたのは、「樋の上遺跡」の他に「上辻（かみつじ）遺跡」、「下辻（しもつじ）遺跡」、「三尻中学校校庭遺跡」などであり、主に昭和50年代にかけて行われている。当時、これらの「遺跡」は調査地点が離れており、字名が異なっていたことから、それぞれ個別に遺跡名が付けられていた。そして、「樋の上」の名が付く遺跡は、現在の遺跡範囲北東端にある埼玉県立熊谷西高等学校付近にのみ広がる遺跡とされていた。しかし、これらの「遺跡」で検出された遺構の時期や分布状況、そして自然堤防上に立地する地形等を考慮すると、すべて同一の遺跡ではないかとの見解が予めから各報告において述べられていたため、熊谷市教育委員会では平成16年度に行った市内全域の埋蔵文化財包蔵地の見直しの際、これらの「遺跡」をすべて統合し、現在では樋の上遺跡の名称で総面積約465,600㎡を測る広大な遺跡となっている（第3図）。

以下、ここで各調査の概要を列記し、現在の樋の上遺跡について概要を述べておきたい。

遺跡範囲北東端に所在する埼玉県立熊谷西高等学校では、校舎等の建設に伴い、計6回の「樋の上遺跡」の発掘調査が行われている（第3図a～f）。これまでの調査成果については、既に刊行された報告書に詳細が掲載されていることから、それらを参考にして記述する。

第1次調査（第3図1a）は、高等学校開設のための仮校舎予定地において行われた。調査期間は、1974年（昭和49年）12月24日から1975年（昭和50年）2月末まで、調査主体者は熊谷市教育委員会が設置した樋の上遺跡発掘調査会である。検出された遺構は、古墳時代末から平安時代までの住居跡17軒、中世の溝跡、ピット等であるが、出土遺物も含め、資料は整理調査中、火災にあってしまったため、残念ながら詳細について明らかになっていない（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986）。

第2次調査（第3図1b）は、校舎HR棟建設に伴い、実施された。調査期間は、1975年（昭和50年）4月30日から7月28日まで、調査主体者は埼玉県教育委員会文化財保護課である。検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡8軒、奈良時代の住居跡8軒、平安時代の住居跡15軒、掘立柱建物跡1棟、ピット群、中世の溝跡4条、火葬跡3基、ピット群である。出土遺物は、土師器、須恵器、土錘、砥石、石製紡錘車、瓦質土器、陶磁器、古銭等がある（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986）。

第3次調査（第3図1c）は、管理棟建設に伴い、実施された。調査期間は、1976年（昭和51年）5月12日から7月6日まで、調査主体者は埼玉県教育委員会文化財保護課である。検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡3軒、奈良時代の住居跡6軒、中世の溝跡5条である。出土遺物は、土師器、須恵器、土錘、砥石、瓦質土器、磁器、古銭等がある（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986）。

第4次調査（第3図1d）は、体育館建設に伴い、実施された。調査期間は、1977年（昭和52年）4月4日から6月10日まで、調査主体者は埼玉県教育委員会及び県立さきたま資料館（現県立さきたま史跡の博物館）である。検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡3軒、平安時代の住居跡6軒、中世の溝跡11条、土坑14基である。出土遺物は、土師器、須恵器、土師質土器、砥石、瓦質土器、磁器、古銭等がある（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986）。

第5次調査（第3図1 e）は、格技場建設に伴い、実施された。調査期間は、1984年（昭和59年）10月3日から12月15日まで、調査主体者は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団である。検出された遺構は、奈良時代の住居跡2軒、平安時代の住居跡7軒、中世の溝跡6条、火葬跡2基、土坑6基、集石2基である。出土遺物は、土師器、須恵器、古銭等がある（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986）。

第6次調査（第3図1 f）は、プール建設に伴い、実施された。調査期間は、1996年（平成8年）4月1日から6月28日まで、調査主体者は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団である。検出された遺構は、平安時代の住居跡2軒、中・近世の溝跡6条、土坑13基、火葬跡2基、ピット群である。出土遺物は、縄文土器（前期）、石器、須恵器、灰釉陶器、陶器、焙烙等がある（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1998）。

県立熊谷西高等学校に接する東側では、県営ほ場整備事業に伴い、熊谷市教育委員会が「樋の上遺跡」の発掘調査を実施している（第3図2）。調査期間は、1983年（昭和58年）10月21日から1984年（昭和59年）2月21日までである。検出された遺構は、奈良・平安時代の住居跡5軒、中世の溝跡5条、土坑15基、集石遺構7基、火葬跡11基である。出土遺物は、土師器、須恵器、陶器、内耳土器、かわらけ、鉄製品、石臼、板碑、鉄滓等がある（熊谷市教育委員会1985）。

遺跡範囲中央付近では、「上辻遺跡」及び「下辻遺跡」の名称で発掘調査が計2回行われている（第3図3・4）。

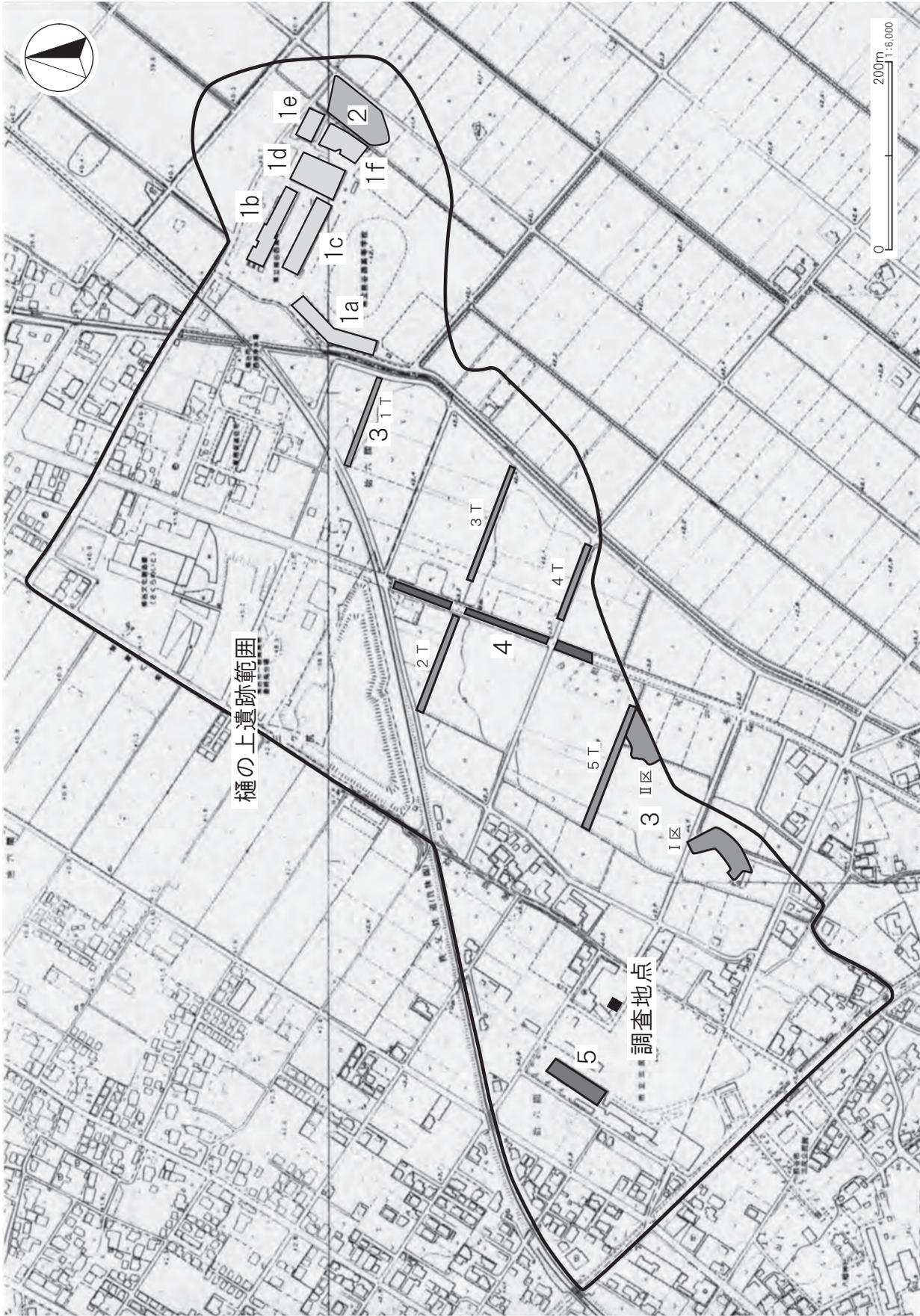
1つは県営ほ場整備事業に伴い、「上辻遺跡」、「下辻遺跡」両方で熊谷市教育委員会が発掘調査を実施している（第3図3）。

「上辻遺跡」の調査は、1981年（昭和56年）11月28日から1982年（昭和57年）2月9日まで実施された。調査区はⅠ・Ⅱ区に分かれており、Ⅰ区で検出された遺構は奈良・平安時代の住居跡19軒、溝跡2条、Ⅱ区は古墳時代中期末の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡9軒、溝跡1条である。出土遺物はⅠ・Ⅱ区あわせて土師器、須恵器、土錘、土製紡錘車、鉄滓、砥石、軽石、編物石、埴輪等がある。

「下辻遺跡」の調査は、1981年（昭和56年）9月1日から11月27日まで実施された。調査区はトレンチ状を呈し、1 Tから5 Tまでに分かれている。1 Tで検出された遺構は、住居跡8軒、溝跡7条、ピット9基、2 Tは住居跡3軒、溝跡1条、ピット6基、3 Tは住居跡4軒、溝跡2条、ピット3基、4 Tは住居跡5軒、溝跡5条、ピット9基、5 Tは住居跡1軒、溝跡3条、ピット5基である。合計すると住居跡21軒、溝跡18条、ピット32基であり、住居跡はすべて奈良・平安時代に相当する。出土遺物は、土師器、須恵器、土錘、鉄製鎌、鉄滓、砥石、軽石等がある（熊谷市教育委員会1984）。

2つ目は「下辻遺跡」において県道三ヶ尻新堀線建設に伴い、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施している（第3図4）。調査期間は、1985年（昭和60年）4月1日から9月30日までである。検出された遺構は、奈良・平安時代の住居跡19軒、溝跡3条、近世の土坑多数、時期不明の溝跡2条、ピットである。出土遺物は、土師器、須恵器、土錘、土製紡錘車、砥石、編物石、石製紡錘車、鉄鍬、鉄釘、鉄鎌、鉄鑿、刀子、かわらけ、内耳土器等である（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1987）。

遺跡範囲南西部に位置する「三尻中学校校庭遺跡」では、校舎増築工事に伴い、熊谷市教育委員会が発掘調査を実施している（第3図5）。調査期間は、1980年（昭和55年）12月8日から1981年（昭和56年）



第3図 調査地点位置図

1月17日までである。検出された遺構は、奈良時代の住居跡10軒、平安時代の住居跡7軒、中世の溝跡2条、火葬跡1基、時期不明の土坑5基、ピット59基である。出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、土製紡錘車、鉄製品、陶器、板碑等である。なお、「三尻中学校校庭遺跡」は、樋の上遺跡南西に位置する三ヶ尻遺跡に一時期含まれていたが、平成16年度の遺跡範囲修正により樋の上遺跡に組み込まれたものである（熊谷市教育委員会2002）。

以上、各調査の概要を列記した。これらの調査の結果、樋の上遺跡では、古墳時代中期末から古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世までの遺構が確認されており、遺跡の主体となる古墳時代後期から平安時代にかけては150軒以上の住居跡が検出されており、集落が大規模かつ広範囲に営まれていたことが明らかとなっている。そして、中・近世は検出された遺構の内容から主に墓、そして区画及び排水用の溝が走り、居住以外の土地利用がなされていたことが明らかとなっている。なお、今回の報告も含め、一部の調査では縄文時代の遺物が若干出土しているが、これまでに縄文時代の遺構は確認されていないことから未調査部分に存在する可能性がある。

2 調査の方法

発掘調査は、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力により遺構確認作業を行った。そして、遺構の手掘り、実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業は、遺構掘削に伴う排出土の置き場を確保するため、調査区を東西半分に分けて西側→東側の順で行っていった。なお、実測作業を行うにあたっては、調査区内に国家座標を合わせた一辺5mのグリッド方式を用いて東西方向を西からアルファベットでAからCまで、南北方向を北からアラビア数字で1から4までつけてグリッド設定をし、グリッド交点に設定した杭を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

3 検出された遺構と遺物

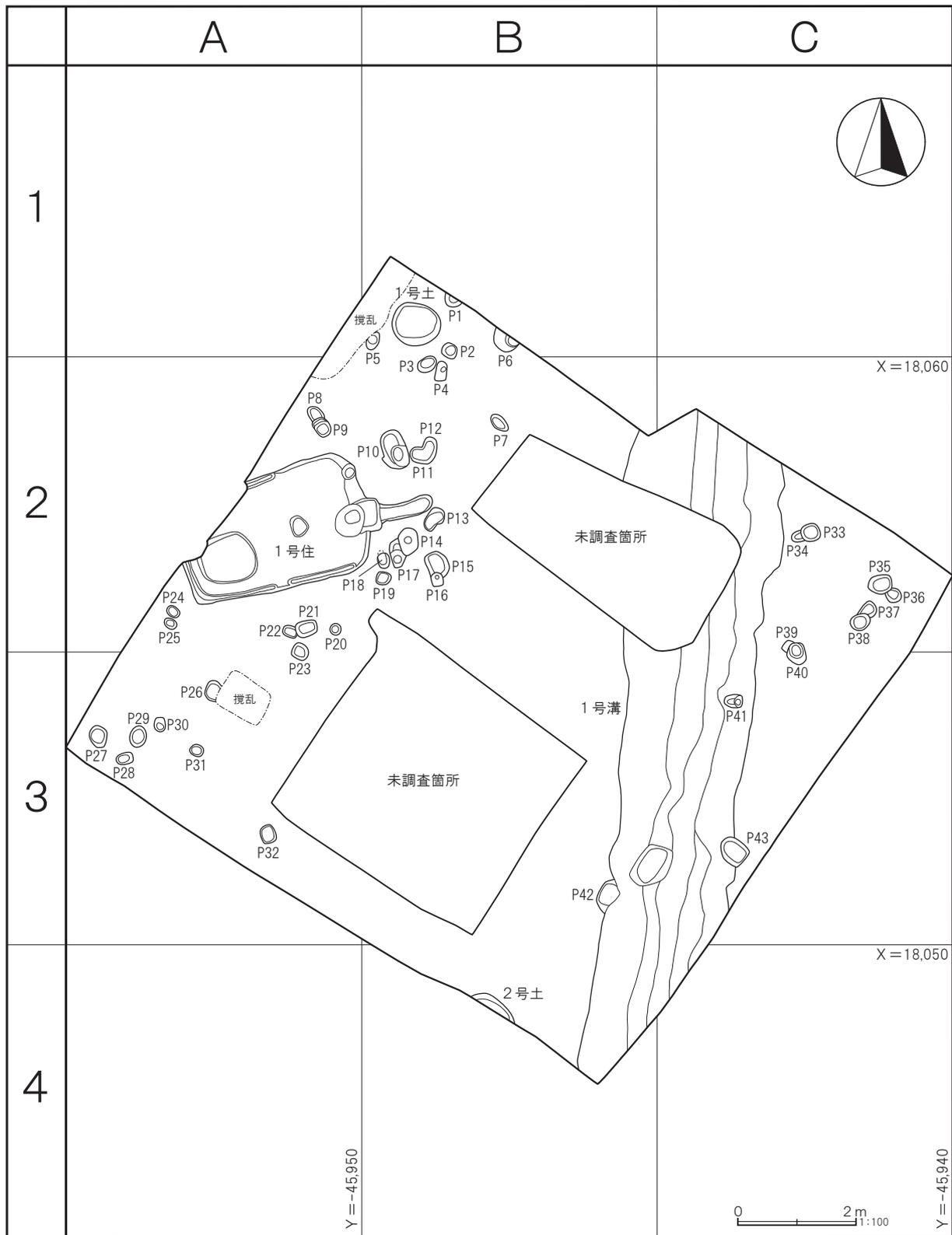
今回の調査地点は、遺跡範囲南西部のほぼ中央に位置する（第3図）。調査面積は100㎡と小さいが、調査区のほぼ全面から遺構が検出された。検出された遺構は、住居跡1軒、溝跡1条、土坑2基、ピット43基である（第4図）。

住居跡は調査区西側ほぼ中央付近から検出された。北西隅付近が調査区外にあるが、検出状況は比較的良好であった。平面プランは縦長の長方形を呈し、東壁にカマドが設けられていた。覆土は一部人為的な埋め戻しが認められた。出土遺物は少なく、図示可能な遺物はカマド焚口部及び煙道部から出土した土師器甕のみである。時期は出土遺物から8世紀後半段階と思われる。

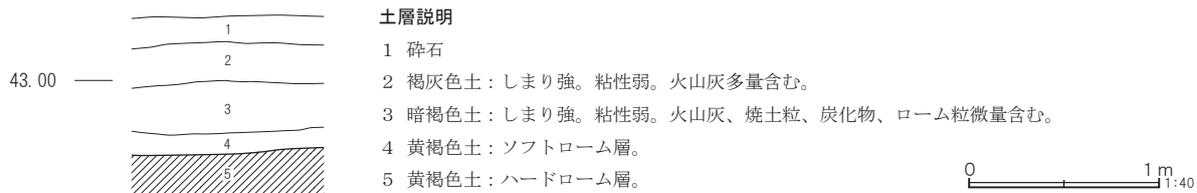
溝跡は調査区東側から検出された。幅が2m前後と幅広でほぼ南北方向に走る。出土遺物は少なく、縄文土器、古墳時代後期の土師器等があるが、いずれも本溝跡に伴うものではないと思われる。伴う遺物はないが、時期は住居跡と軸がほぼ合うことから住居跡と同時期と思われる。

土坑は2基検出された。1号は調査区北西部、2号は調査区南東部に位置する。いずれも平面プランは円形を呈するが、1号は浅く、2号は比較的深い。ともに性格及び用途は不明であるが、2号は人為的な埋め戻しが行われていた。出土遺物がなかったため、時期は不明である。

ピットは計43基検出された。主に調査区の東西に分かれて分布する傾向がみられたが、規則的に並ぶ



第4図 調査区全測図



第5図 基本土層図

ものはなく、東側では溝跡に伴うものもみられなかった。出土遺物が少なく、また図示できるものもなかったため、時期については不明と言わざるを得ない。

なお、基本土層については位置を図示しなかったが、調査区南側ほぼ中央付近で確認した。調査区内は概ね平坦であり、ほぼ全面において同様の層位を確認した。詳細については第5図のとおりである。

IV 遺構と遺物

1 住居跡

第1号住居跡（第6図）

A・B-2グリッドに位置する。北西隅付近のみ調査区外にある。他の遺構との重複関係はみられない。規模は長軸3.20m、短軸2.07mを測り、平面プランは縦長の長方形を呈する。主軸方向はN-78°-Eを指す。確認面からの深さは最大0.39mを測る。床面はやや凹凸がみられ、中央付近がやや高くなっていた。貼り床は確認されなかった。覆土は二層（1・2層）確認された。下の2層はレンズ状に堆積しており、混入物の内容等から自然堆積と思われるが、上の1層はローム粒やロームブロックを多量含んでいたことから、2層堆積後、人為的に埋め戻されたと思われる。

カマドは東壁ほぼ中央に位置する。壁外へは1.1m張り出す。袖部は確認されなかった。幅は焚口部が0.54m、燃烧部と煙道部の境は0.35m、煙道部は概ね0.26m前後を測る。焚口部には長軸0.57m、短軸0.47m、床面からの深さ0.52mのピット状の深い掘り込みがみられ、燃烧部と煙道部の境には高低差0.26mの段が設けられていた。煙道部はほぼ平坦であり、先端で鋭角に立ち上がる。煙道部先端の底面には煙り出し用に据えられたと思われる土師器甕が破片で確認された。また煙道部の両脇及び燃烧部の南側のみ被熱により壁が赤色化していた。カマドの覆土は4～9層が該当する。このうち、4・6層は天井部崩落土と思われる、間に焼土粒・ブロックを多量含む5・7層が確認された。焚口部で確認されたピット状掘り込みの覆土（9層）は、しまりが強く、上に灰を含む8層が確認されていることからカマド使用時には埋め戻されていたと思われる。

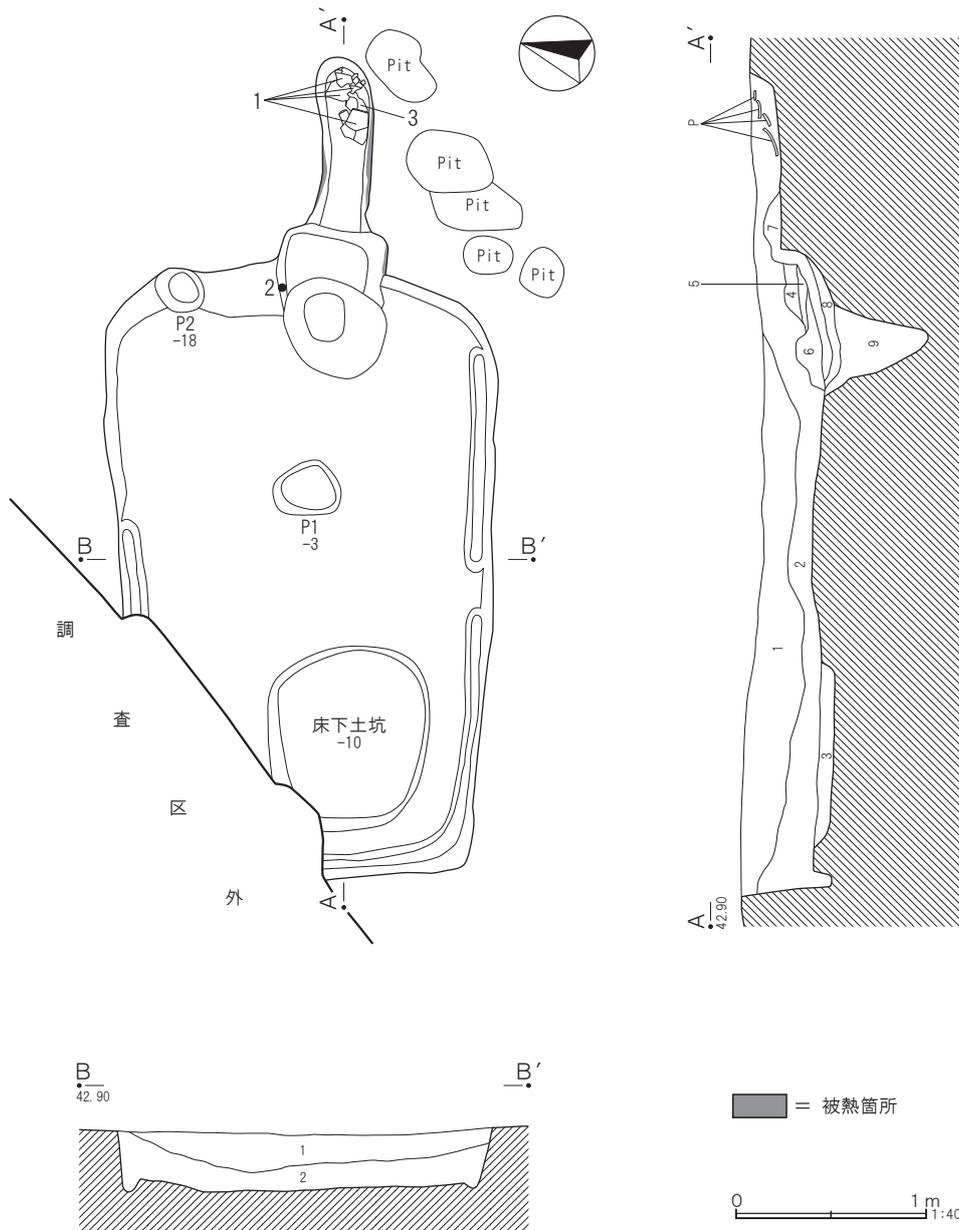
ピットは二つ確認されたが、いずれもその位置から支柱穴とは考えられない。ピット1は床面ほぼ中央に位置する。長軸0.36m、短軸0.29mを測り、いびつな楕円形を呈する。床面からの深さが0.03mと極めて浅いことから掘り方の一部である可能性もある。ピット2は北東隅に位置する。径0.25m前後のほぼ正円形を呈し、床面からの深さは0.18mを測る。貯蔵穴の可能性はあるが、遺物が検出されなかったことから本住居跡周辺に位置する単独ピットの一つである可能性もある。

壁溝は東壁沿い以外に巡るが、北壁は西側半分のみ、南壁はほぼ中央付近で一旦途切れている。西壁は約半分が調査区外にあるが、おそらく全周して北壁の壁溝に接続すると思われる。幅は狭い所で0.09m、幅広の所で0.14mを測るが、概ね0.12m前後が主体となる。床面からの深さは浅い所で0.03m、深い所で0.09mを測る。

床下土坑は、南西隅付近から一つ確認された。長軸0.97m、短軸0.85mの隅丸方形を呈し、床面からの深さは0.1mを測る。覆土は黒褐色土一層のみ（3層）である。しまりが強いことから埋め戻されたと思われる。

出土遺物は図示不可能なものも含め非常に少ない。図示できた遺物は、土師器甕（第7図1～3）のみである。このうち、1・3はカマド煙道部先端の底面から、2はカマド焚口部北側から出土した。この他では、8世紀代と思われる須恵器及び土師器の坏が覆土から数点出土しているが、いずれも小片であり、図示不可能であった。

1～3は、いずれも器壁が薄く、口縁部は「く」の字状を呈するが、1・2は外面上部に弱い稜を持



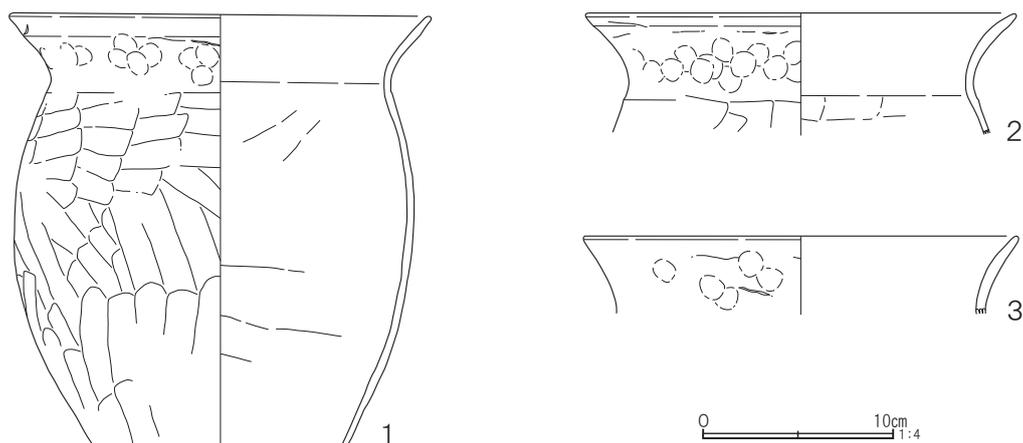
第1号住居跡

土層説明 (A A' B B')

- | | |
|---|------------------------------------|
| 1 暗褐色土：しまり強。粘性弱。ローム粒・ブロック多量、焼土粒所々に微量含む。埋め戻し土。 | 5 黒褐色土：しまり・粘性弱。焼土粒・ブロック多量含む。 |
| 2 黒褐色土：しまり強。粘性弱。ローム粒・ブロック少量含む。自然堆積土。 | 6 黄褐色ブロック：天井部崩落土。4層と同じ。 |
| 3 黒褐色土：しまり強。粘性弱。ローム粒微量含む。 | 7 黒褐色土：しまり・粘性弱。焼土粒・ブロック多量含む。5層と同じ。 |
| 4 黄褐色ブロック：天井部崩落土。 | 8 暗褐色土：しまり・粘性弱。焼土粒、ローム粒多量、炭化物少量含む。 |
| | 9 暗褐色土：しまり・粘性強。焼土粒、ローム粒少量含む。 |

第6図 第1号住居跡

つ。1は口縁部から胴下部まで、2は口縁部から胴上部までの部位、3は口縁部である。ほぼ全形の分かる1は、最大径を口縁部に持ち、胴部は倒卵形を呈し、中段付近がやや膨らむ。調整はすべて口縁部が内外面ともに横ナデであり、外面には指頭圧痕と輪積痕がみられた。1・2の胴部は外面がヘラ削



第7図 第1号住居跡出土遺物

第3表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 甕	22.2	(22.7)	—	ABEGHKN	赤褐色	B	口~胴60%	
2	土師器 甕	(22.6)	(6.4)	—	ABDHJKN	橙色	B	口~胴20%	
3	土師器 甕	(20.8)	(4.05)	—	ABDGHJKN	橙色	B	口縁部20%	

り、内面はヘラナデ調整である。1の外面のヘラ削りは上部が横位、以下は縦・斜位に施されている。本住居跡の時期は、8世紀後半を中心とした段階と思われる。

2 溝跡

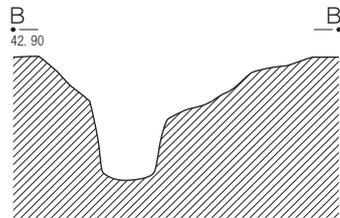
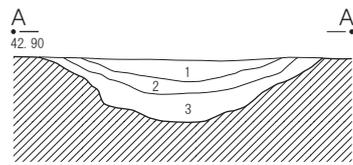
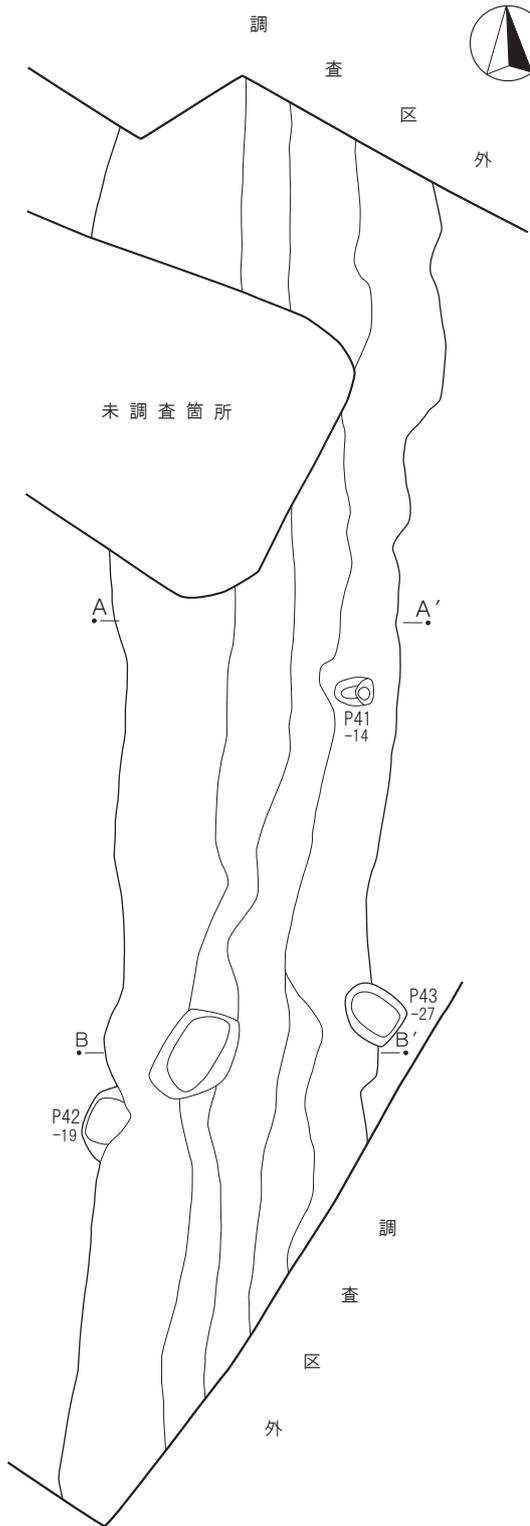
第1号溝跡 (第8図)

B・C-2~4グリッドに位置する。B・C-3グリッドでピット41~43と重複しているが、43は本溝跡を切っており、41・42との新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向に走り、両端以降はともに調査区外に延びる。検出された長さは6.63mを測る。幅は狭い所で1.92m、幅広の所で2.70mを測るが、2.20m前後が主体となる。確認面からの深さは0.50m前後を測り、断面形は概ね船底状を呈するが、南東部では深さ0.1~0.25m下にテラス状の段が認められた。またB・C-3グリッド境付近では底面からピット状の掘り込みが一つ確認された。長軸0.80m、短軸0.55mを測り、平面プランはいびつな長方形を呈する。底面からの深さは0.52mを測る。本溝跡に伴うものと思われるが、用途等について不明と言わざるを得ない。覆土は三層(1~3層)確認された。混入物が少なく、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物は少なく、図示可能なものは縄文土器深鉢(1~9)、古墳時代後期の土師器甕(10)のみである。いずれも破片での検出であり、流れ込みと思われる。

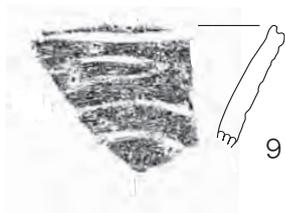
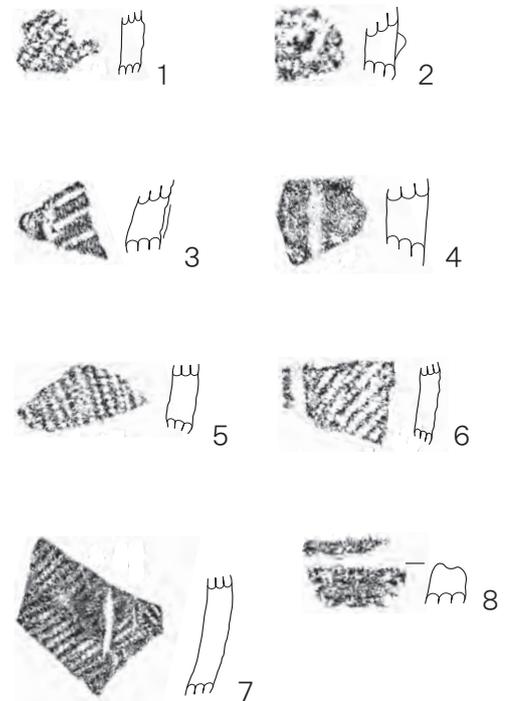
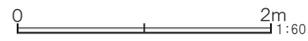
1~9は縄文土器深鉢の破片。1は縄文時代前期・黒浜式土器の胴部片。胎土に繊維を含む。外面にはLR単節縄文が施文されている。2は縄文時代中期中葉・勝坂式土器の胴部片。分かりづらいが、外面は隆帯に沿って半裁竹管による押引文が施文されている。3~7は縄文時代中期後葉・加曽利E式土器。3~6は胴部片、7は胴下部片である。3は垂下する隆帯脇にやや細い沈線が斜位に描かれている。4は幅広の浅い沈線が垂下する。両脇は無文である。器壁が厚い。5~7は単節縄文が施文されて



第1号溝跡

土層説明 (A A')

- 1 暗褐色土：しまり強。粘性弱。ローム粒少量含む。
 - 2 黒褐色土：しまり強。粘性弱。ローム粒少量含む。
 - 3 暗褐色土：しまり強。粘性弱。ローム粒少量含む。
- 1層より明るい。



第8図 第1号溝跡・出土遺物

第4表 第1号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器深鉢	—	—	—	AGHJNO	にぶい橙色	C	胴部片	前期。黒浜式。
2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABCHN	にぶい褐色	B	胴部片	中期中。勝坂式。
3	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDH	にぶい橙色	C	胴部片	中期後。加曽利E式。
4	縄文土器深鉢	—	—	—	ABCGHKN	にぶい赤褐色	C	胴部片	中期後。加曽利E式。
5	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGHN	にぶい赤褐色	B	胴部片	中期後。加曽利E式。
6	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGHN	にぶい赤褐色	B	胴部片	中期後。加曽利E式。
7	縄文土器深鉢	—	—	—	ABCGHN	にぶい褐色	B	胴下部片	中期後。加曽利E式。
8	縄文土器深鉢	—	—	—	ADGN	にぶい橙色	B	口縁部片	後期初。称名寺式。
9	縄文土器深鉢	—	—	—	ABCGHIJKN	にぶい褐色	B	口縁部片	後期初。称名寺式。
10	土師器甕	—	(3.95)	(6.5)	ABDHIJKN	橙色	B	底部25%	古墳後。

いる。5はRL、6・7はLRである。6・7は縄文脇に沈線が垂下する。沈線は6が幅広、7はやや細く、途切れている。8・9は縄文時代後期初頭・称名寺式土器の口縁部片。ともに口縁端部に沈線が巡り、9は外面に幅の一定しない浅い沈線で弧状の文様が描かれている。沈線区画内に縄文等は施文されていない。

10は古墳時代後期の土師器甕の底部。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。器壁が厚い。

本溝跡からは伴う遺物が検出されていないが、1号住居跡とは軸がほぼ合うことからおそらく同時期と思われる。

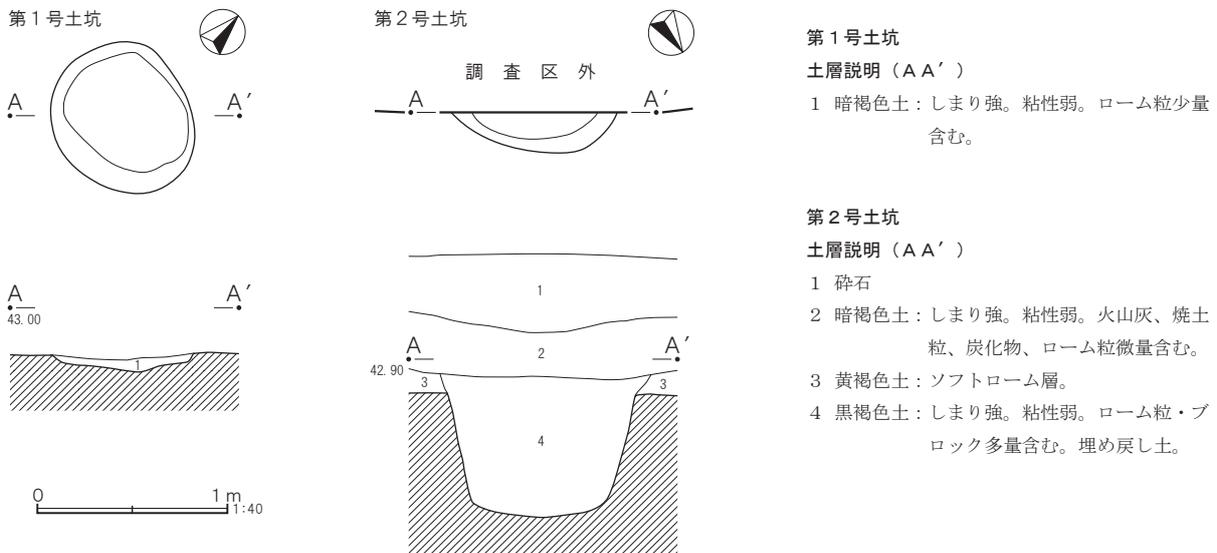
3 土坑

第1号土坑（第9図）

B-1グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

規模は長軸0.82m、短軸0.71mを測り、平面プランは楕円形状を呈する。確認面からの深さは最大で0.07mと浅く、断面形は挿鉢状を呈するが、北側のみ立ち上がりが鋭角に掘り込まれていた。覆土は暗褐色土一層（1層）のみである。ローム粒を少量含んでいたが、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。また、性格及び用途についても不明と言わざるを得ない。

遺物が出土しなかったため、本土坑の時期は不明である。



第9図 第1・2号土坑

第2号土坑（第9図）

B-4グリッドに位置する。南側大半が調査区外にある。他の遺構との重複関係はみられない。

正確な規模は不明であるが、検出できた東西幅は0.87mを測ることから0.90m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは最大0.65mを測るが、調査区壁での土層断面観察では0.75mであることが確認された。断面形は逆台形状を呈し、立ち上がりは鋭角で、底面はほぼ平坦であった。覆土はローム粒・ブロックを多量含む黒褐色土一層（4層）のみであり、人為的に埋め戻されたと思われる。性格及び用途については不明と言わざるを得ない。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

4 ピット

ピットは計43基検出された。主に調査区の東西に分かれて分布する傾向にあるが、規則的に並ぶものはなく、第1号溝跡に関連すると思われるものもみられない。平面プランは主に隅丸方形や楕円形を呈し、径は0.30m前後のものが多い。深さは0.04~0.60mまでと幅がみられるが、0.30m前後のものが多い。

出土遺物は、土師器の小片がピット1・7・8・9・28・29から数点出土しているが、いずれも図示不可能である。よって、各ピットの時期は不明と言わざるを得ない。各ピットの計測値等については第5表を参照のこと。

第5表 ピット計測表

No.	位置	長(m)	短(m)	深(m)	備考	No.	位置	長(m)	短(m)	深(m)	備考
P1	B-1G	—	0.32	0.46	北側調査区外。	P23	A-2・3G	0.29	0.25	0.13	
P2	B-1・2G	0.36	0.34	0.16		P24	A-2G	0.23	0.18	0.05	
P3	B-1・2G	0.34	0.24	0.14		P25	A-2G	0.22	0.16	0.06	
P4	B-2G	0.33	0.23	0.19		P26	A-3G	0.34	—	0.35	東側攪乱により欠。
P5	A-1G	0.32	—	0.47	西側攪乱により欠。	P27	A-3G	0.38	0.31	0.13	
P6	B-1G	0.47	—	0.37	北側調査区外。	P28	A-3G	0.29	0.20	0.32	
P7	B-2G	0.35	0.21	0.08		P29	A-3G	0.36	0.29	0.33	
P8	A-2G	—	0.23	0.11	P9より古。	P30	A-3G	0.25	0.20	0.08	
P9	A-2G	0.34	0.25	0.29	P8より新。	P31	A-3G	0.23	0.20	0.19	
P10	B-2G	0.67	0.45	0.53		P32	A-3G	0.30	0.26	0.08	
P11	B-2G	0.41	0.37	0.23	P12との新旧不明。	P33	C-2G	0.32	0.29	0.21	P34より新。
P12	B-2G	0.46	0.25	0.21	P11との新旧不明。	P34	C-2G	0.19	—	0.08	P33より古。
P13	B-3G	0.42	0.29	0.31		P35	C-2G	0.39	0.33	0.14	P36との新旧不明。
P14	B-3G	0.42	0.33	0.53	P17との新旧不明。	P36	C-2G	—	0.25	0.07	P35との新旧不明。
P15	B-3G	0.46	0.36	0.18	P16との新旧不明。	P37	C-2G	—	0.25	0.09	P38との新旧不明。
P16	B-3G	0.24	0.19	0.36	P15との新旧不明。	P38	C-2G	0.34	0.28	0.25	P37との新旧不明。
P17	B-3G	0.49	—	0.42	P14との新旧不明。	P39	C-2G	—	0.22	—	P40より古。
P18	B-3G	0.26	0.20	0.30		P40	C-2・3G	0.37	0.30	0.35	P39より新。
P19	B-3G	0.24	0.22	0.16		P41	C-3G	0.30	0.22	0.14	1号溝との新旧不明。
P20	A-2G	0.20	0.19	0.06		P42	C-3G	—	0.60	0.19	1号溝との新旧不明。
P21	A-2G	0.37	0.28	0.12	P22との新旧不明。	P43	C-3G	0.49	0.41	0.27	1号溝より新。
P22	A-2G	0.25	0.19	0.04	P21との新旧不明。						

V 調査のまとめ

樋の上遺跡は、櫛引台地下に広がる自然堤防上に立地し、縄文時代から古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世まで長期間にわたって続く複合遺跡である。遺跡の主体となる古墳時代後期から平安時代にかけては大規模な集落が広がっており、今回の調査では住居跡が1軒のみであるが、確認されたことでその一端を明らかにすることができたと言える。

今回の調査地点は、遺跡範囲内でも南西部に位置し、過去に調査及び報告がなされた「三尻中学校校庭遺跡」とは約900mの距離にある。「三尻中学校校庭遺跡」の概要については、第Ⅲ章1でも述べたが、さらに詳細について述べると、調査区のほぼ全面から古代の住居跡が17軒確認されている（熊谷市教育委員会2002）。時期は7世紀末から10世紀初頭まではほぼ絶え間なく続き、報告書によるとⅠ～Ⅵ期に時期区分されている。時期別による軒数は、Ⅰ期の7世紀末～8世紀初頭が1軒、Ⅱ期の8世紀前半が3軒、Ⅲ期の8世紀後半が5軒（うち1軒はⅣ期に相当する1軒と同一住居であり、新旧段階に分けられている。）、Ⅳ期の8世紀末～9世紀前半が5軒、Ⅴ期の9世紀後半が3軒、Ⅵ期の9世紀末～10世紀初頭が1軒の計17軒となっている。今回の調査で確認された住居跡は、出土遺物が少ないため、時期をはっきり特定できないが、8世紀後半を中心とする段階であることから上記の時期区分ではⅢ期、ないしⅣ期に相当する。従って、遺跡範囲南西部では当段階の住居跡が少なくとも6軒存在していたこととなる。

樋の上遺跡における集落の開始時期は、過去に調査及び報告がなされた「上辻遺跡」Ⅱ区（熊谷市教育委員会1984）で確認された古墳時代中期末段階となるが、現時点では1軒のみの確認であり、多くの住居跡が認められるようになるのは、古墳時代後期でも7世紀後半に入ってからである。

7世紀後半段階の住居跡は、遺跡範囲北東部では確認例が多いが、遺跡範囲中央付近から南西部にかけては今のところ認められず、そのすべてが奈良時代以降に相当する。ただ今回の調査地点や「三尻中学校校庭遺跡」では、7世紀代の土器が若干ではあるが、出土していることを考慮すると、おそらく遺跡範囲南西部においても7世紀後半段階の集落が存在する可能性が高い。従って、遺跡範囲南西部においても北東部と同じく7世紀後半から集落が営まれ始め、「三尻中学校校庭遺跡」と今回の調査地点の間及び周辺には、7世紀後半段階も含めた数多くの住居跡が眠っていることが想定される。

樋の上遺跡の集落は、古墳時代後期については本遺跡南西に広がる三ヶ尻古墳群、律令体制の始まる奈良時代以降については、本遺跡の北西約4kmに位置する古代役所推定地である深谷市幡羅遺跡及び熊谷市西別府祭祀遺跡、西別府廃寺などの遺跡群との関連が考えられるが、いずれにしても本遺跡周辺ではこれほどの規模を誇る集落は存在しないことから、長期間にわたって拠点的作用を担っていたことが考えられる。

以上、紙面の都合もあり、簡潔に述べた。今回の調査はこれまでに実施された調査成果をトレースする内容と言えるが、調査は遺跡総面積の数%しか行われていないため、依然不明な点が多いことは否めない。今後さらなる資料の増加を待って再度検討していきたい。

引用・参考文献

- 川本町遺跡調査会 2003 『百済木遺跡』川本町遺跡調査会報告書第8集
- 熊谷市教育委員会 1982 『中条遺跡群Ⅲ 権現山古墳・常光院東遺跡』
- 熊谷市教育委員会 1984 『三尻遺跡群 上辻・下辻遺跡』
- 1985 『三尻遺跡群 黒沢館跡・樋ノ上遺跡』
- 1986 『三尻遺跡群 若松遺跡・黒沢遺跡・東遺跡』
- 1988 『寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡』
- 1988 『三尻遺跡群 社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡』
- 1990 『西方遺跡』
- 1992 『西別府廃寺』
- 1994 『西別府廃寺(第二次)』
- 1999 『横間栗遺跡』
- 2000 『寺東遺跡・別府氏館跡』
- 2000 『西別府祭祀遺跡』
- 2002 『三ヶ尻遺跡Ⅱ』
- 2003 『一本木前遺跡Ⅳ』
- 2004 『籠原裏遺跡』
- 2005 『籠原裏古墳群』
- 2006 『拾六間後遺跡』
- 埼玉県遺跡調査会 1971 『横塚山古墳』
- 埼玉県教育委員会 1984 『池守・池上』
- 1988 『埼玉の中世城館跡』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集
- 1984 『三ヶ尻林(2)・台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第34集
- 1986 『樋の上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第59集
- 1987 『下辻遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第69集
- 1989 『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
- 1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
- 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 1995 『根絡・横間栗・関下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集
- 1998 『樋の上/皇山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第205集
- 2008 『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集
- 深谷市教育委員会 2010 『幡羅遺跡Ⅵ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第111集

写真図版



発掘作業風景



調査区西側全景



調査区東側全景



第 1 号住居跡



第1号住居跡カマド



第1号住居跡カマド煙道部遺物出土状況

图版 4



第 1 号住居跡覆土堆積状況(1)



第 1 号住居跡覆土堆積状況(2)



第 1 号溝跡

图版 6



第 1 号土坑



第 2 号土坑



第1号住居跡 第7図1



第1号住居跡 第7図2



第1号住居跡 第7図3



第1号溝跡 第8図10



第1号溝跡 第8図1～9

報告書抄録

ふりがな	ひのうえいせき							
書名	樋の上遺跡							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	—							
編集者名	松田 哲							
編集機関	埼玉県熊谷市遺跡調査会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2012（平成24）年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東緯 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひのうえいせき 樋の上遺跡	くまがやしじゅうろっけんあざしほつき 熊谷市拾六間字芝付 ほんちほか 419番地他	11202	59-018	36° 09' 41"	139° 19' 21"	20110825 ～ 20110907	100	幼稚園園舎 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
樋の上遺跡	集落跡	縄文時代前・ 中・後期	—		縄文土器			
		古墳時代後期	—		土師器			
		奈良時代	住居跡 溝跡	1軒 1条	土師器・須恵器			
		時期不明	土坑 ピット	2基 43基	土師器			

埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

樋の上遺跡

平成24年3月23日発行

発行／埼玉県熊谷市遺跡調査会

印刷／朝日印刷工業株式会社